福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

探究型の学習展開に向けてII音楽科教育における協働的な実践への試み

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-10-17 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉村, 治広 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/6872

探究型の学習展開に向けて Ⅱ

音楽科教育における協働的な実践への試み

吉村 治広

はじめに

本稿は、筆者の教職大学院の兼担スタッフ２年目の経験を踏まえ、新しい授業づくりの課題について教科教育の視点から報告するものであり、『教師教育研究 vol.4』の拙稿「探究型の学習展開に向けて―音楽科教育の視点から―」の続編に位置づけられる。

前稿では、音楽科教育の現状と課題、自身の来歴と研究テーマとの関わりから、音楽科における「探究」の重要性に焦点化して記述した。一方で、そこに付記したとおり、教職大学院におけるスタッフ･院生･子ども間の様々な「教科を超えた協働」に触れ、「探究」と同時に「協働」の必要性にも目を向けざるを得なくなった。そこで本稿では、探究型の学習が協働的に行われることで期待される教育効果について、教科教育法の授業における音楽教育サブコース学生、及び、教科教育専攻院生との探究型の授業案づくりの試みを振り返る。 それは、教職大学院での学びを学部や他専攻の大学院の教育につなぐ兼担教員としての取組であると同時に、ともに新たな授業を構想する院生たちとの「協働」とも捉えられるものであった。

１．教科教育専攻（芸術教育領域）院生との取組

（１）探究型の授業づくり

福井大学の大学院（教育学研究科）は、学校教育専攻、教科教育専攻、教職開発専攻（教職大学院）で構成されている。平成 22 年度後期、担当する「音楽科教育法研究Ⅱ」の授業を、本学教育地域科学部芸術･保健体育教育講座音楽教育サブコースから教科教育専攻（芸術教育領域）に進学した３名の Ｍ１院生（福地美紀、今井理恵子、小原慶子）が履修した。既に半期、教職大学院で多様な院生同士が教科や立場を超えた交流によって成長する姿を目にしていた筆者は、教職大学院で得られた知見を取り入れながら、次のような授業を展開していった。

まず、教科教育に関する基本的な理解を確認しつつ、芸術認識･教科学習･総合的な学習、教育改革（PISA，ゆとり教育）等に関する文献を検討した。さらに、同じく本学教育地域科学部出身で教職大学院（教職専門性開発コース）に進学した同級生、林院生の夏期集中講座のレポート[1]を検討した。レポートには、インターンとして週３日拠点校に勤務していた林院生が、やがて楽しい授業を目指すべきか、力がつく授業を目指すべきか迷い始めた様子が描かれていたが、その経過を中学校という場の雰囲気とともに読み取った３名の院生は、大きく頷きながら口々に「共感できる」と感想を述べた。それは、文脈や書き手の認識の変容を重視して記述される長期実践報告のような形式の文献が、時に感想文と揶揄される側面を持ちながらも、その特質の故に他者の共感を呼び、動機づけた場面として、強く印象に残っている。学部時代の教育実習での現場体験しかない教科教育専攻の院生たちは、同級生の拠点校での濃密な体験を自らに引きつ

けることで、教育実践に対するイメージをより具体化することができたのである。

また、子どもが内発的に動機づけられるような「探究型」の授業の必要性について、ピンクの動機づけに関する著書[2]や伊那小学校の研究紀要を検討するとともに、教科センター方式・70 分授業で問題解決学習を展開する至民中学校公開研究会への参加を通して、院生の「授業」に対する意識は高まっていった。

その上で、前稿に示した探究型授業の構想と具体化の方法論の実践事例として、コンテクストを位置づけた音楽科の学習を紹介し、院生に新しい授業づくりの可能性を示した。ここに至って、院生の音楽科における探究型の授業づくりに対する意欲はいよいよ高まり、その後の授業では実践のアイディアを学習に構成しようとする試行錯誤と検討が活発に行われた。そこで、この取組の成果を日本学校音楽教育実践学会北陸地区例会で共同発表することにした。結果的に、３月に開催予定であったこの地区会は東日本大震災の影響で前日に中止が決定されたが、５本の学習展開案を発表する準備はできていた[3]。いずれも、学習展開の可能性をフローチャート形式で示しながら、探究の広がりと深まりに対応できる教師の支援の手立てを準備しようとする意欲的なものであった。うち３つの概略のみを次に示す。

①福地美紀「合唱コンクールを考える」（対象：高校１年生）

授業が賞をとるための練習の時間でよいのか？生徒自身に「(校内)合唱コンクールはこれでいいのか」問い直す。学習展開の可能性として「聴き手に関すること」「音楽の聴き方に関すること」「評価に関すること」「伝わることに関すること」の４つの視点を想定しており、最終的に、生徒自身にこれからどのような音楽表現を目指していくか、来年のコンクールをどうするかを決めさせる。

②今井理恵子「ミュージックレターを贈ろう ―感謝の気持ちを伝えよう―」（対象：中学３年生）

道徳の時間に書いたお世話になった人への手紙を、卒業に際し、感謝を伝える音楽付のミュージックレターとして贈る。音楽は自分だけが楽しんでいればよいのか？伝えたい相手のことを考えることで「どのように自分の気持ちを表現するか」問い直す。学習展開の可能性として「聴き手の立場」「演奏者の立場」「作詞者の立場」「作曲者の立場」の４つの視点を想定している。

③小原慶子「ＣＤデビューしよう!? ―自分たちの作った曲でも売れるのか―」（対象：高校１年生）

ＣＤデビューという目標に向けて、流通の仕組みを理解し、売るために必要な様々な工夫を考える。学習展開の可能性として「どうしたら売れるのか」「著作権って何だろう」「そもそも、自分たちのＣＤは売れるのか？」の３つの視点を想定し、最終的にＣＤを売り出すのか否か結論を出させる。

（２）「協働」を重視した展開へ

前項に示した院生による授業案は、探究の深化の可能性を幅広く予想し、計画したものではあったが、「協働」がもたらす効果を十分に考慮したものではなかった。そこでさらに、平成 23 年度前期開講の「音楽科教育演習」では、授業案を「協働」の視点から再検討することに取り組んだ。象徴的なことに、３人が遠慮なく互いの発想を刺激し、批評し、影響を与え合うような院生同士の関係性は、その過程を陰で支える大きな力となった。発表には至らなかったものの、学会地区会での発表という公的な意味を帯びた共通の目標に向かって「新しい授業づくり」に切磋琢磨したことが、そのような望ましい関係性を築き、院生各個人に確かな手応えとさらなる挑戦への自信をもたらしていた。そしてまた、子どもの協働的な学習展開を、院生の「協働」を通して検討するという相似形の取組が、彼女らの「協働」に対するイメージを更新していったのである。

協働の方法論に関する具体的な知見としては、本学教職大学院修了生である竹内（2011）の長期実践報告[4]を検討し、多くの示唆を得た。この報告を取り上げた理由は、７年間に渡り、竹内が養護教諭の立場から仕掛けていった保健の授業における生徒の協働の姿が、各年１単元分（６時間～10 時間）の報告を中心に生き生きと描かれており、その展開を追うと、授業づくりにおけるドキュメンテーションの工夫、２サ

イクル構成、プロセス評価、授業外活動との連携、知識・技能の定着、校内・校外連携等の課題と対応の具体を、その変遷と成果に学ぶことができるからである。加えて、性、感染症、応急手当、生活習慣といった実生活における身近で切実な問題が探究のテーマとなっていることで、音楽科の院生という専門外の読み手にも共感的理解が得やすかったことも大きい。後日、竹内が勤務する本学附属中学校の公開研究会に参加した院生は、そこでまた、生徒の協働の息吹を身近に確認することもできた。

さらに、「協働」を子どもの立場から体験的に理解させるため、学部授業「音楽科教育法Ⅱ」との同時展開による協働的な探究学習を実施した[5]。学部生を取り込むことで、小グループ学習を展開できる人数の参加者を確保すると同時に、院生に各グループのリーダーとしての役割を期待したものである。小学校４年生の歌唱共通教材「スキーの歌」（林柳波 作詞、橋本国彦 作曲）を題材に展開した授業の概要を次に示す。

【授業の概要】

（１）全員で「スキーの歌」を歌唱する。（５分）
（２）スキー滑降映像（妙高杉ノ原スキー場）を視聴した後、「ゲレンデがとけるほど恋したい」を聴取する。（10 分）
（３）セッションⅠ：３つの小グループ（ホーム班）に分かれ、「スキーの歌」と「ゲレンデがとけるほど恋したい」（スキー場で流れていそうな曲）の違いを考える。（20 分）
（４）セッションⅡ：別の３つの小グループ（ジグソー班）に分かれ、スキーを題材に選んだ歌･音楽としての「スキーの歌」の「よさ（価値）」を考える。（15 分）
（５）セッションⅢ：最初のグループ（ホーム班）に戻り、「スキーの歌」の「よさ（価値）」を最高に生かした「何か」のプロデュース案を企画書にまとめる。（30 分）
（６）各班のプロデュース案を順に発表し、相互評価する。（10 分）
（７）昭和初期のスキー場の映像を視聴し、授業の感想を書いて提出する。（10 分）

この授業のねらいは大きく２つあった。１つは、前述したとおり、協働で進める探究学習の効果と方法に関する理解を学生が深めることであるが、もう１つ、音楽科教育に特有の課題として「歌唱共通教材」の価値を捉え直すねらいがあった。後者は、指導すべき歌として学習指導要領に記載され、公的な価値を特別に背負った「歌唱共通教材」で何を教える（べき）かについて、正に教育実践上のリアリティをもって考えることとなる。現在のスキー場で聴かれることもなく、学生から「笑える」とまで低く評価された「スキーの歌」の「よさ（価値）」を最高に生かした「何か」をプロデュースするという課題を設定したのは、浅沼も指摘するように、探究の成否の鍵を握るのが探究内容の価値である[6]からに外ならない。皮肉なことに、「矛盾に満ち」、予想外のイメージを浮かび上がらせるものとして歌唱共通教材には大きな可能性が見出されるのである。仲間とのコミュニケーションを通してユニークな発想が形になることを期待していたとおり、各班で活発な議論が展開され、結果、次の３つの企画案が提案された。

Ａ班：企画タイトル「NHK 連続テレビ小説（朝ドラ）『スキーの歌』主題歌」
　　コンセプト＝スキーの歌が生まれた軌跡を追う
　　表現の工夫＝元のイメージを崩さず今風に
Ｂ班：企画タイトル「みんなで１から作る雪あそび」
　　コンセプト＝幅広い世代の交流、雪あそびの原点を知り受け継ぐ
　　道具を使わず、身近なもので工夫して遊ぶ
　　表現の工夫＝お年寄りや親世代と遊びながら、さりげなく口伝
Ｃ班：企画タイトル「好きーの歌」
　　コンセプト＝いろんなアーティストにサンタさんに変装して歌ってもらう
　　気に入ったアーティスト別のステージで、それぞれの音楽性や人となりを体験

表現の工夫＝様々なアーティストがスキーの歌やスキーの思い出話を通してスキーの歌を演奏

この企画立案の過程で、３人の院生は各班の議論の流れが大きくズレないよう、それぞれの持ち味を出しながら進行役を果たした。

A班では、今井が 3 つのセッションを通して意見の引き出し役に徹していた。ニュートラルな立場から他者の発言を生かしつつ、ともに考えを深めようとしたことで「『スキーの歌』の良さを始まりの頃はあまり感じられなかったが、いろんな活かし方があるということがとても面白かった」と新たな気づきも得られた。

B 班では、メンバーの意見を丁寧に整理していた福地が、曲のよさを考えるセッションⅡの段階では、学習指導要領の求める価値を踏まえ「世代を超えて受け継いでいきたいのは」という視点を提起し、その後の文化的側面に関する議論を導いた。また、指導者の視点で全体の流れを捉えており、「グループの意見をどう全体で共有するか、話し合う視点のもっていき方の順序などがとても参考になってよかった」と振り返っている。

一方、C 班では、小原が当初から一貫して「スキーの歌」に対する否定的な感情を隠すことなく、本音でメンバーに向き合った。それでも、その価値を見出そうとするセッションを通して、文化的価値･教材化の意義に一定の理解を示すようにはなったが、指導を強制される不条理感を拭うことはできなかった。「この授業の最後に、やはり好んで聴こうとは思わないし、自分にとってのスキーのイメージとはどうしても合わないのだが、どうしてそうなのかを考えるきっかけになりました」と感想を述べている。

この授業を通して、学生・院生は「協働」の有効性を確認すると同時に、教師側の探究（教材研究）の必要性にも気づくことになり、授業の一つ目のねらいは十分に達成された。また、二つ目のねらいについても、各セッションを通して、音楽的な特徴と効果の認識の面のみならず、嗜好の面でも曲への価値付けが変化したこと、さらに、作曲された頃のスキー場の様子や文部省唱歌という位置づけを含むコンテクストへの注目という確かな変容がみられた。もちろん、何かひとつの答えにたどり着けばよいわけではなく、また、このまま子どもを対象とする授業に転換して実践可能なものでもない。あくまでも教師の内心の問題として「歌唱共通教材」をどのように捉えるか、音楽科の教師を志す者同士、答えのない問題に協働で取り組んだことを通して、学びが深まり広がる実感があったことは間違いない。院生にとっても、この授業は、音楽科における協働的な探究学習を構想する上で、そのイメージをより具体化させる契機となった。

さらにその後も、授業案の再構成に向けて、できるだけ「協働」の視点から学習展開の具体を考える機会を設けた。６月には、学部３年生の模擬授業案をともに検討することも行った。３名の院生は、クラシック音楽とポピュラー音楽をマッシュアップして新たな音楽をつくろうという学部生のユニークな授業案を、活動の広がりとねらいの焦点化の兼ね合い、子どもの動き、評価等の視点から協働的に検討し、悩んでいた学生に多くの示唆を与えることができた。

２．授業実践に向けた方法と課題

（１）授業案の再構成

このような真摯な院生の取組を踏まえ、最終的な目標として実際に授業を実践できないかと考えた。何事にも前向きな院生の意向を確認した上で、本学附属中学校で音楽を担当する柳教諭に相談したところ、３学年を通してロングスパン構成された指導計画の隙間を縫って、再構成した授業案の授業実践をさせてもらえることになった。実は、これまでの附属中学校との音楽科に関する連携については、研究会等に向けた教員間の協力関係はあったものの、教育実習の時期的な問題があり、お世話になった学部生の指導内容について協働的に省察するような関係が築かれてはいなかった。それだけに、週３日のインターンのよって様々な教育実践上の課題にぶつかり、悩み、成長している教職大学院のストレート院生の姿をみる度に、教員を目指している教科教育専攻芸術領域（音楽）院生の実践力育成に資する機会の必要性を感じて

いた。したがって、院生との授業研究の取組が契機となって附属中学校との新たな連携に結びついたことは、正に「協働」の実現に向けた大きな一歩となった。

３人の院生には、秋の授業実施前に柳教諭から実践可能な授業案を選定してもらうという新たな目標が掲げられ、授業案の検討がさらに熱を帯びることになった。３時間配当という条件の下、再構成された授業案の概要のみを以下に示す。

①福地美紀「これからの音楽表現を探究する」（対象：中学２年生）
合唱祭の発表ビデオを視聴して、審査員として評価する。評価の観点について交流するなかで、自分たちの表現を見直し、今後のクラスの音楽表現の方向性について考える。

福地は、高校１年生を対象に立案した授業案「合唱コンクールを考える」を、附属中学校の行事や生徒の実態にあわせて修正した。評価の観点をあえて３つに絞った審査員が記入する審査票を作成し、それを意見交流の素材とする工夫を考えた。それは、探究の広がる可能性を一定程度狭めるものであり、修正前のフローチャートと比較すると限定案といえる内容になっている。しかしそれこそが、生徒の協働に必要なことと配慮したのである。

②今井理恵子「ミュージックレターを贈ろう ―感謝の気持ちを伝えよう―」（対象：中学１年生）
部活等でお世話になった卒業する先輩への感謝を伝える音楽付の手紙を作成する。

今井は、単元名を変えないまま、「ミュージックレター」の書き手を卒業生から１年生に変更し、同時に協働で学習する範囲も、想定していた４つの展開可能性から「聴き手」と「演奏者」の２つに絞った。それにより、授業案は「自分の好きな音楽のよさを、それに気づいていない他人に伝える」課題を通して、音楽的な価値を捉え直す学習として再構成されることになった。音楽観を拡大させ、その後の学習に生かすという意味でも、卒業前でなく、より早い段階で実施すること方が効果的と考えた結果でもある。

③小原慶子「これって違反!? 著作権について考えよう」（対象：中学３年生）
「卒業記念ＤＶＤをより多くの人に知ってもらうための新たな取り組みをプロデュース」する上で、著作権に触れないような広報の仕方について考える。

小原は、高校１年生を対象に CD デビューという課題を設定することで、流通の仕組みを知り、売れるための音楽的な工夫を学ばせることを考えていたが、中学３年生を対象とする広報活動に限定した学習として再構成した。ここでは、新学習指導要領で求められるようになった知的財産権の理解が、学習の過程で避けて通れない指導内容として準備されている。答えがあらかじめ定まっているような知識の習得が、協働のプロセスのなかで行われることでどのような効果を上げるのか、手段としての協働の可能性に期待するものである。

（２）附属中教員による評価と実践上の課題

10 月に入り、これら３本と同時に修正立案された２本をあわせた計５本の授業案を携え、附属中学校に柳教諭を訪ねた。実践する授業を選定する事前検討会では、院生がそれぞれの授業案について順に説明し、柳教諭から生徒の実態に即した実践的な助言を受けていった。筆者も院生も実施を許される指導案は当然１本と考えていたが、どの授業案も生徒の発意を促す興味深い内容になっていると高く評価され、５本中３本の実践を是非と薦められた。しかし、２・３本目の授業案はその実施時期が 12 月以降にずれ込まざるを得ないことから、それぞれの修了研究に取り組む院生には条件が厳しく、11 月に１本のみ授業を実施す

ることとなった。

なお、上記の３案では、①案が歌唱の指導内容が一段落したばかりという時期的な理由から実施は難しいと判断された。実際、それは５本の授業案のなかでも、典型的な音楽科の教育内容の問い直しにつながりかねない発展性を内包しており、実践には相当の準備と覚悟が必要となる。したがって、その前後の展開に責任をもてない院生が実施するのは現実的ではない。ただ逆に言えば、それだけ高い教育効果が期待できる授業案であり、声の表現を重視している附属中学校であればこそ、実践によって得られるものも大きいと考えられる。

結果、附属中学校で実践することになったのは、福地の立案した２本目の授業案であった。彼女は元々、自身の関心の１つとして、自主的な附属中での授業参観を行っていたが、実践が決まってからは、何度も実施学級に通い、生徒のことを理解しようと努めた。附属中学校がいかに授業を大切にしているかを実感していたが故に、少しでもよい授業にしようと、教材の作成、教員との打合せ、筆者や院生との相談等、できるかぎりの努力を惜しまなかった。そのような姿勢に感心した柳教諭は、内容的にも３時間配当ではもったいないと、さらに１時間融通してくださり、４時間配当の授業計画に練り直されることになった。１時間毎に授業案の微調整は繰り返されたものの、４回を通した授業実践は、次のような概要で展開された。

福地美紀「15 秒で伝える思い!! ―サウンドロゴを取り入れた CM を作ろう―」（対象：中学１年生）

「愛級祭」に向けて、クラスのよさをアピールする方法として、サウンドロゴ入り CM 制作に取り組む。生徒は広告代理店の CM プランナーとして、クライアントであるクラス担任の要望（15 秒、声によるサウンドロゴ、クラス全員が出演者等）を制作の条件とし、チームで企画を立案する。社内コンペにあたる企画発表会で相互評価（評価の観点は「クラスのよさをアピールしているか」と「音楽的要素を効果的に使って表現しているか」の２点）した後、最も評価の高い企画を実際にビデオ撮影し、クラスのよさ・音楽の効果について再考する。

この授業案を①～③の案に比べると、１つひとつの活動内容それ自体には驚くほどの目新しさは感じられない。サウンドロゴの創作も音楽科教育における授業実践として、かなりの数の先行事例がある[7]。しかし、この授業案の独自性と価値は、学級集団への帰属意識を高める「愛級祭」という附属中学校ならではの学校行事との関連を図りながら、CM プランナーという憧れを感じさせるような仕事の仮想体験として、授業の場を設定した点にある。実際、授業者である福地が、最初の時間にその設定を伝えた時には、期待にあふれたどよめきが教室を包み、多くの生徒が「まじー」「おもしろそう」といった声を漏らしていた。このことから、探究する内容に関しては、授業対象とした生徒を内発的に動機づけるものであり、その有効性は明らかであった。一方、学習展開における協働の必然性に関しては、チーム対抗で競わせ、最終的に作品化するという外発的な動機づけの枠組みで保険をかけている。協働的な探究学習の授業案としては、十分な可能性をもっていると考えられた。

しかし、実際に授業を進めていくと、いくつかの課題がみえてきた。もちろん、授業の実践力という点で経験の少ない授業者にある程度の困難が生じることは折込済みであったが、「協働」で主体的に取り組ませるという条件によって生じる難しさがあった。最も不安のあった生徒の特性や思いの把握という面については、授業実施前から継続的に授業見学をしていたことで生徒との関係も良好で、グループ活動の場面における配慮や声かけも十分であった。むしろ、学習計画そのものに協働的な探究学習への意欲を削ぐ要因が含まれており、それが指導を難しくさせたのである。

最大の要因は、４時間配当という制限であった。至民中学校が 70 分授業で問題解決学習に展開しているように、探究には余白ともいえる部分を含む十分な時間を確保する必要がある。福地には、CM におけるサ

ウンドロゴの例を複数紹介し、音楽表現の工夫を確認させた上、その後の学習を展開させたいという思いがあった。丁寧に手作りした掲示物や音源等を準備して、わかりやすく理解させようとしていたが、その思いが余って、状況に応じた教材の取捨選択ができなかった。基礎的な知識を与え、その活用イメージを湧かせることで学習意欲を高めようとする授業者のねらいとは裏腹に、初発の動機づけがあまりに上手くいったことで、十分に活動への意欲が高まった生徒を形式的な枠組に押しとどめる構図になってしまったのである。基礎基本の確認と自由な発想による創造的な表現に必要な時間を、どうマネジメントしバランスをとっていくか、学習展開に対する見通しの精度とともに、生徒の実態に応じた臨機応変な対応力が必要になる。なお、実際には、クラス担任でもある柳教諭から生徒に対して、昼休みや放課後の時間に遅れが出た分の自主的な活動を促していただいたことで、予定どおり４時間目には CM 撮影を実現することができた。

そして、もう１点、この学習において生徒の意欲に影響を与えた要因として挙げられるのが教具面での制約である。映像表現において、簡単なテロップを入れたり、シーン切替にどのような表現効果をつけるかといったことは、CM 制作における当然の工夫として生徒がイメージするものであるが、撮影用に準備したビデオカメラは、そのような効果を誰もが簡単に操作できるようなものではなかった。撮影データをパソコンに読み込んで映像処理ソフトで完成させるにしても、効果の種類や量を皆で確認しながらといった使い方をするには準備も大掛かりになる。例えば、グループ毎に iPad を準備するようなことができれば、状況は大きく変わるだろう。同様に、音楽表現に関しても、有効な教具を活用することで「協働」の質を高めることができる。今回、旋律的な抑揚のあるサウンドロゴを考えたグループはキーボードで音を確認していたが、声を使った生の表現という制約があったため、サウンドロゴの音楽的な表現の可能性はかなり限定されていた。それは年間指導計画における内容としての妥当性を優先した選択であったが、サウンドロゴの創作活動において生徒の学習意欲を刺激する条件としては、やや弱かったように思われる。声以外の様々な音が使用できる教具があれば、あるいは、声の表現に限定するにしても、そこに音響的なサウンド効果をつけるような教具があれば、サウンドロゴの表現が多様化する。そこからイメージが広がることで、それをどのようなシナリオに位置づけるかというアイディアに結びつき、総合的な表現としての CM 制作に対する意欲もより高まると考えられる。

３．実践を経て得られる理解と成長

全ての授業終了後、授業者の福地は、３時間目が終わった時点では、事前に想像したほど生徒が動かなかった印象があり苦しい思いを持っていたが、最後の CM 制作に至って、初めて「やってよかった」という達成感を感じたことを打ち明けてくれた。実際、学習を協働的に展開させるには、教師主導であれば簡単に指示するところを、時に同時進行している複数の生徒同士の関わり合いの状況をみながら、適切なタイミングで支援しなければならない。立案した計画どおりに進めるのに比べ、精神的な余裕と我慢、そして高度な実践力が必要になる。それをよく知る柳教諭からは、事前、そして毎時間後に丁寧な助言をいただいた。福地にとっては、協働的な展開を経験することを通して、生徒に向ける視線の重要性を実感することになった。また、福地の奮闘を間近に見た他の院生にとっても、実践することで気づき学べるものがいかに大きかを痛感することになった。限られた時間ではあったが、専門的で高度な授業実践に挑戦し、挫折と希望を味わったことは、教職大学院でインターンを経験している同級生にも劣らぬ学びとなったはずである。

「理論と実践の往還」は、既に使い古された感さえするフレーズであるが、21 世紀に求められる能力の育成に欠かせない協働的な探究学習を組織・実践してみると、その言葉の重みを改めて認識することになる。生き物のように変化する授業に、パターン化された完成形を求めたり、それを並べて準備したりするような思考で立ち向かっても成果が上がらないだろう。よりよい成果を求め、十分に戦略的に計画した上で、その場で有効な対処を実践的に選び取っていく力を身につけるしかない。その難しさ故に、教師には

成長の可能性が開かれているのであり、「学び続ける教師」という認識の必然が共有されることになる。そして、協働的な探究学習を追究する過程において、「教科」と「教職」の間にある壁も乗り越えられることになるのであろう。

---

[1] 林 克磨「楽しい授業を目指していた」福井大学教職大学院 2011 年夏期集中講座レポートより

[2] ダニエル・ピンク『モチベーション 3.0 持続する「やる気！」をいかに引き出すか』講談社，2010 年

[3] 2011 年 3 月 13 日に石川四高記念文化交流館で開催が予定されていた日本学校音楽教育実践学会第６回北陸地区例会は 3 月 11 日に発生した東日本大震災により急遽中止となった。

[4] 竹内雅子「養護教諭のアイデンティティとその形成プロセスを支える実践コミュニティ」『学校改革実践研究報告』(福井大学教職大学院)，第 103 巻，2011 年

[5] この実践の学習効果に関しては、拙論「教員養成における探究型授業実践の試み―歌唱共通教材の価値を考える―」『学校音楽教育研究』第 16 巻，2012 年，pp.247-248 を参照。

[6] 浅沼茂『「探究型」学習をどう進めるか』教育開発研究所，p.3，2008 年。浅沼は、探究型の学習の成否は、「何か特定のスタイルをとるだけではなく、その内容の価値が重要」な鍵を握っており、成功した実践を吟味すると「その内容が矛盾に満ちて、私たちの生活においておかしみや予想外のイメージが浮かび上がったとき」に方法、即ち「形式の重要性を光らせる要素となっている」と指摘している。

[7] 例えば、興梠 徹「音楽科における言語活動の充実～共通事項の指導を通して～」『大阪教育大学附属池田中学校研究紀要』，第 50 集，2012 年 等の例がある。